

カムイヤキについて

信寛良(花徳出身)

今から千年も前の焼き物(カムイヤキ)の窯跡が発見されたと聞いて是非訪ねたいと思っていたが、島に帰ると用事が多く、アツと言う間に日にちが過ぎてしまう。今回も同様に帰る間際になってようやく時間の都合ができた。

まずは、窯跡の場所を教えてください。おとうと伊仙町の歴史民族館を訪ねた。月曜日で休館日にも係わらず所用で出勤していた新里亮人氏が現地を案内して下さいました。島ならではの感謝！感謝！

カムイヤキは、鹿児島県吹上浜近くの金峰町からトカラ列島、奄美諸島、沖縄県の島々、与那国島、波照間諸島まで陶器が出土されていたが、それが何処で造られたか分からなかった。その窯跡(生産地)が義憲和氏(前歴史民族館長)と四元延宏氏(現館長)の地道なフィールドワークにより伊仙町阿三、檜福の山の中

から発見された。

新里亮人氏によると、窯跡は公式には百基と言っているが二百基ほこえるだろうと言っていた。

これは、琉球列島で唯一の焼き物の生産拠点であること、日本の焼き物の四代流通圏の一角を占めることになるという。

カムイヤキは千度以上の高温で焼かれるため、茶褐色でなく、瓦色をしている。従来の重たい焼き物に比べて軽くて丈夫なため、使い勝手、輸送にも適している。

私が驚くのは、徳之島の先祖が千年も前(平安時代)にこのようなものを作って三百年の間、流通させていたことである。焼き物の技術もさることながら、リーダーなどない時代に七島灘の荒波も恐れず小船を漕ぎ出す勇氣、航海技術、それにもまして組織力、経済力が無ければ成しえないことである。



(写真1) 日本の焼き物、4つの流通圏

沖繩に王朝が形成される以前、徳之島に強大な豪族(アジャ)が居たと想像する。新里氏に徳之島の歴史を是非解き明かして頂きたい。

後日わかったことだが新里氏は、沖縄県から賞を受けるなど新進気鋭の考古学者である。

突然訪れた私のような者に現地を案内するなど、フットワークの軽さに驚いた。この場をお借りして先生に御礼を申し上げます。有り難うございました。

平成25年1月



(写真3) カムイヤキの窯跡



(写真2) 壺(つぼ)、甕(かめ)、碗(わん)などが造られていた

※写真3は信が撮影。1と2は伊仙町教育委員会資料から